

第 8 回「多職種のための投稿論文書き方セミナー」Q&A

令和 6(2024)年 6 月 22 日(土)開催

(敬称略)

【Q1】ナラティブレビューとスコーピングレビュー、システムティックレビューとは、それぞれ別のものと解説していただきましたが、投稿論文の中には、研究方法として論文を読み込んでテキストでこのように書いてあったとしてカテゴリーにまとめたとする論文が多いのですがそのようなまとめ方でもよいのでしょうか？

【A1】目的をどのように設定するかによります。たとえば、どういう尺度があるのかとして尺度についてまとめるのもよいし、こういう目的でこういうカテゴリー表をつくりますというまとめ方でスコーピングレビューをすることでも良いです。目的をしっかりと定義することが大事です。やってはいけないのは、効果を検証する目的で、系統的レビューをやらなれないといけないのにスコーピングレビューで出すということです。スコーピングレビューでは、効果検証はできませんので、目的が異なります。スコーピングレビューは、表にまとめる形になり、メタ解析は行いません。(大田)

【Q2】投稿論文の中には国内の論文をまとめたというものが多くありますが、先ほど先生が出された医中誌と PubMed の二つはおさえておきましょうということでしょうか？ CiNii も含めてよいですか？

【A2】そうです。スコーピングレビューの場合は二つ以上のデータベースを使うということがガイドラインに書かれています。日本の研究でも医中誌だけではなく PubMed でしか出されていない論文もあります。日本の一般人口を対象とした研究のレビューをしたいということであればそれでも良いのですが、英文の論文も入れてもらえると広がって網羅的にみることができます。また、データベースごとに特徴があります。たとえば、CINAHL であれば看護系の論文が多く、PsycInfo であれば心理系の論文を引けます。自分の研究テーマにあったデータベースを選ぶということができればよいと思います。CiNii は博士論文も検索できますので、目的に応じて利用してもいいと思います。(大田)

【Q3】役割分担について、スコーピングレビューについても二人以上で行う方が効果的でしょうか？

【A3】そうです。PRISMA スコーピングレビュー報告ガイドライン(www.prisma-statement.org)でも、risk of bias については二人で付けること、スクリーニングは必ず二人で独立して別々に行いマッチングさせることでヒューマンエラーを防ぐということになっています。(大田)

【Q4】文献検索のときの英語でのキーワードの入力の際、MeSHタームにする前は考えられる語句を何個も投入するという考えでよいのでしょうか？

【A4】はい、最初は MeSH タームに絞り込む前に、関連しそうな語句を幅広く試すのが良いです。同義語、専門用語、一般用語、単語の変化形などを考慮し、ブール演算子(AND, OR, NOT)を活用して検索範囲を広げます。見つかった論文から MeSH タームを確認し、検索を洗練させると効果的です。(大田)

【Q5】研究に使用する尺度の選び方についてアドバイスをお願いします。

【A5】信頼性・妥当性が確認されている尺度を使用する必要があるということは大前提です。その他の側面から回答いたします。○○尺度の○○は構成概念を示します。従って、尺度名だけでは、その尺度が何を測定しようとしているか、その実態を捉えることができません。なぜなら同じ構成概念でも異なった側面を測定しようとしている場合があるからです。一般的に使用されている有名な尺度であるから使用するというようなことは控える必要があります。尺度を使用するにあたり、十分な吟味が必要な点として、①尺度の構成概念の定義はどのようなものであるか、②具体的な測定項目としてどのような内容であるか、③その尺度の使用が自分の研究目的にかなっているかなどです。(長谷川)

【Q6】査読をしている中で、ここをもう少しこう書いてくれたら伝わるのではないかとこのところについて経験をもとにお聞かせください

【A6】いわゆる「論文の書き方」に記されているような内容については、書籍にお任せします。セミナーの中でもお話をした「流れに一貫性がない」ことを具体的な次元に落とすとすると、究極のところ「一文一義」と「キーワードの繰り返し」ができていないかどうかになるでしょう。論文の投稿前に、この点について注意深く検討していただけるとよいでしょう。おそらく、ご自分でも「うまく書けていないな」と思う箇所は、「一文一義」と「キーワードの繰り返し」ができていない箇所であることが少なくないでしょう。ご自分が書かれた文章

について、語と語、句と句、文と文の関係性が適切か丁寧に確認する習慣をもつことができれば、査読者からの「流れに一貫性がない」という抽象的な指摘も少なくなるかと思います。(長谷川)

【Q7】相関係数の値の解釈について確認したいのですが、講義の中で触れられていた基準関連妥当性の相関係数についての評価についてのお話なのでしょうか？人を対象にして評価をしているとそれほど高い相関係数を得られないことが多いのですが、その結果についての解釈についてのお話なのでしょうか？

【A7】相関係数が高い・低いの話は尺度との関係の話ではなく、相関係数そのものが絶対的に何らかの意味をもっていると解釈されているのではないかと思われる投稿論文が少なくないという文脈でお話しました(たとえば、相関計数が 0.3 だったから「弱い相関」と書くべきもの)。このようなことが生じる主な要因として、初学者向けの統計の教科書に、相関係数の数値の解釈(弱い相関・強い相関)が書かれていることにあるように思います。そのような教科書では、相関係数のイメージをもってもらうために数値とその解釈が書かれている場合がありますが、相関係数の強さ・弱さは数値の絶対的評価ではありません。例えば、身長計で 100 人の人が連続して 2 回測定した相関が 0.9 であるとき、それは強い相関があるととらえるべきでしょうか。そのような文脈のお話をさせていただいた次第です。

大事なことは、何と何の相関を算出しているのかという点を意識することにあるように思います。基準関連妥当性の確認において、どの程度以上あればよいかということは難しいのですが n が十分であれば 0.4 以上ぐらいを妥当性があるとする論文が多いという印象です。(長谷川)

【Q8】講義の中で示された資料の URL や QR コード等をもう一度教えてください。

【A8】動画を確認してください。(大田・長谷川)

【総括】講師の先生方には研究の進め方としてレビューの仕方と心理尺度の選び方を、また、研究成果の発表の仕方として読者に伝わる文章の書き方をご教授いただきました。私たちが文献データベースから条件に合う論文を見つけ出し、集めた論文から必要なデータを抽出できるのは、各論文の著者が「何をどうしてどういう結果を得たのか」明確に読者に伝わるような書き方を共有しているからです。自身もそのように論文を書くことで、あとから続く研究者が成果を活かしてくれます。本誌ではスコーピングレビューの投稿が増えてきましたが大田先生のご講義をもとに検索式の組み方、フローチャートの作り方、バイアスリスクの評価など投稿前に今一度見直してください。また、レビュー論文の掲載で終わらせるのではなくレビューの結果明らかになったギャップや課題をもとに自身が取り組んだ研究の投稿をお待ちしています。長谷川先生には長年のご経験を踏まえ編集委員や査読者が査読中の文章から受けることの多い違和感の正体を言語化していただきました。整然としているようで論拠やそこに至る思考過程の説明が抜け落ちている文について「どうおかしいのか」問題点を一つ一つ指摘することは査読者にとってたいへん骨の折れる作業なのですが、指摘された側は問題点に気づきにくいものなのです。SNS の投稿が誤解を招くことがあるように単に文を短くすれば良いということではありません。また、参考文献には検索して目についた自分にとって読みやすい紀要などを採り上げるのではなく、その領域の直近のレビューや原著論文を対象とすることでより広い視点で考察したことが読者に伝わるでしょう。